

干ばつ・用水不足対策

10月

水 稲

水稻節水栽培基準を参照のうえ、適切な水管理を行う。

- 1 落水期（成熟期前 5～7 日）頃までは黒湿り程度の水分状態を保つ方がよいので、田面が白乾きにならないように走水をして水分を補給する。

大 豆

- 1 畦間かん水の行えるところでは、1 週間間隔でかん水する。かん水量は走り水程度とし、滞水しないようにする。
- 2 畦間かん水の行えないところでは、水中ポンプや動力噴霧機等を利用してホースかん水を行うとともに、土面からの水分の蒸発を抑えるため、畦間に敷草等をする。
- 3 カメムシ類の多発が予想されるところでは、防除基準に従って害虫防除を徹底する。

茶

- 1 土面蒸散を抑えるため、敷草、敷藁を行う。
- 2 かん水施設があり、水源が確保されていれば、少量でもよいからスプリンクラーかん水する。
- 3 秋芽が発生している園では樹勢を回復するため、秋整枝を避け、春整枝にする。

野 菜

- 1 土壌乾燥の防止
マルチや稲藁等を活用して、土壌からの水分蒸発を抑制する。
- 2 蒸散抑制
摘芽や摘葉などを適宜行い、繁茂による過剰な蒸散を抑え、土壌水分の減少を緩やかにする。
施設では、開放面積を増やすなどして、ハウス内気温上昇を抑える。
- 3 かん水及び施肥
限られた水量を使用する場合、一回のかん水を十分に行い、根群全体に水分供給ができるようにする。追肥は液肥を利用し、かん水同時施肥を行うことで、水と肥料の利用効率を高める。
- 4 病虫害防除
温暖化・少雨により、ハダニ類やヨトウムシ類の発生が助長されるため注意する。

果 樹・オリーブ

- 1 土壌乾燥の防止
 - 1) 根の多く分布している場所へ稲藁、敷草等を実施し蒸散を防ぐ。
 - 2) 除草剤の利用にあたっては、接触型および吸収移行型を使用し、土壌処理型は使用しない。
- 2 かん水（節水利用）
 - 1) 細根が多く分布している部分へ集中的にかん水する。
 - 2) 水量が十分確保できる場合は、7～10日間隔で20～30 t /10 a を全面かん水する。（ただし、ミカンでの多量かん水は裂果を発生させるので10 t /10 a 程度とする。）
 - 3) 水量が不十分な場合は、細根が多く分布している部分へ集中的にかん水する。1 樹当たりかん水量は150～200㎥とし、約1 週間ごとにかん水する。
- 3 樹勢の維持および樹体の保護
 - 1) 収穫期を迎えたものは、着果の多い樹から順次収穫を進める。（柑橘、カキ、キウイフルーツ、オリーブ）
 - 2) 着葉数の少ない樹勢衰弱樹は、枝幹の日焼けを防止するため、保護剤を塗布する。
 - 3) 収穫の終わったモモ、ブドウへの礼肥などの肥料は降雨後に施用する。

- 4) 薬害防止のため、高温時の薬剤散布を避ける。
- 4 病虫害防除
温暖化・少雨により、カメムシ類、ハダニ類の発生が助長されるため注意する。

花 き

- 1 敷藁、マルチの励行
マルチや稲藁等を活用して、土壌からの蒸散を抑制するとともに、地温の上昇を防ぐ。
- 2 病虫害防除
ハダニ類、アブラムシ類、スリップス類、ヨトウムシ類などの発生が多くなるので防除に努める。高温時の散布は薬害が生じやすいので、朝夕の涼しい時に薬液濃度を薄めにして散布する。
- 3 かん水
かん水時刻は高温時を避けて、早朝あるいは夕方に行う。
限られた水量を使用する場合、回数を減らしても一回当たりのかん水量を多くし、根群全体に水分供給ができるようにする。
- 4 施 肥
追肥は干ばつが解消されるまでは、置き肥でなく薄めの液肥を与える。
- 5 電 照
キクなど高温乾燥によって花芽分化を起こしやすいものは、電照開始時期を早めるとともに電照時間をやや長くする。
- 6 土寄せ
根量を増加させるため、できるものは株元に土寄せし、新根の発生を促す。

畜 産

- 1 家畜管理
家畜の飲用水は十分に確保するとともに、衛生対策を確実に実施して、家畜の事故発生と生産性の低下を防止する。家畜の異常は早期に発見し、初期の治療に努める。
 - 1) 畜舎環境の改善
 - ①ファン送風の実施、通風の改善
 - ②飼育密度の軽減等
 - 2) 飲用水および飼料の管理
 - ①十分な飲用水の確保（貯水タンク設置、飲水器からのこぼれ水防止等）
 - ②畜舎やパーラー等関連施設等で利用する水の節減（除ふんを徹底して、消毒の効果に支障をきたさない程度に節水）
 - ③飼料保管管理の徹底による変敗防止等
 - ④必要に応じ、ビタミンやミネラル等の補助飼料を適正に給与
- 2 飼料作物
夏作飼料作物の生育不良により、粗飼料不足が懸念される場合には、イタリアンライグラス、エン麦等冬作の作付草種、時期等を調整し、粗飼料確保に努める。